

研修所トピックス<1>



佐渡の中学生と鼓童研修生の 交流公演

文 千田倫子
トピックス<1><2>とも

全国から集まった若者(研修生)達が、佐渡の風土の中で様々な実習・稽古に打ち込み、目標に向かって専心している姿を通して、中学生の皆さんと共感、交流を計りたい。そして普段あまり接することのない太鼓の魅力を感じていただく機会となれば、と七年前から始めた「佐渡の中学生と鼓童研修生の交流公演」。佐渡の中学全三〇校のうち、毎年二、三校ずつ現在まで十五校ほどで交流をさせていただいてきた。

鼓童の舞台メンバーの山口幹文、最近の五年間は齊藤栄一が演出・進行し、研修生二年生と、佐渡の中学生の皆さんとの生き生きとした心を引き出す役を受け持っている。研修所で習ってきた鼓童の舞台演目や、地元の方から習った鬼太鼓、自分達で作った曲などを演奏し、太鼓や研修所の説明、最後に生徒さんに一緒に太鼓を体験していただく、といった内容になっている。当初は、鼓童の活動自体を丁寧に説明していく必要も大きかったが、最近は研修生その人が主役となり、年齢の近い者同士、目標に向かって努力する者同士の文字どおりの交流、刺激し合う場になってきたように思う。それは、一年前いただいた、当時両津市立南中学校長(現在、金井中学校長)の逸見先生のお話から生まれたものだった。

「今の中学生をみてみると、ものごとに見方に振り組んでいる生徒が、格好の悪い生き方のように見られ、ときにからかいの対象にされることがあります。しかし、私は何事にも精一杯取り組むことの尊さを生徒達に伝えたいと思っています。それには輝いて生きている多くの人の生き方に接し、心を揺り動かされる体験をしていくことが大切であると考えています。皆さん方

これまでいただいた感想文から
平成8年当時佐和田中学校長 岩崎先生

「鼓童の正式メンバーによる舞台も何度か見、感動に胸を打ち震わせているが、この度の交流会のそれは今までのものと異質な気がする。目頭が熱くなり、それが臉に涙となって宿るのを人に見られるのが恥ずかしくて、そっと後方に場所を移した私だった。何だろう、この涙は。躍動感が鼓童の舞台だとすれば(もちろん、それだけではない)研修生の打つ太鼓の音色はメンバーに及ぶべくもないだろうが、太鼓に向かう心根とか、太鼓を打っている瞬間の境地には、それほどの差はあるまい。近頃よく聞く言葉に『人生は自分探しの旅だ』というのがあるが、真剣に、ひたすらに、そして健気に自分探しの旅を続けている彼らへの共感と羨望が私の涙の答えだろう。だとすれば、将来鼓童に残れる確率の少ないことなどさして問題ではない。ひとり一人にとって、その一瞬一瞬が『自分探しの旅』なのだから。素晴らしい姿を、素晴らしい時間を、ほんとうに有り難う。」

両津市立南中学校3年の生徒さん

「昨日、鼓童の研修生の方達による演奏会がありました。それは見せる側・見る側の壁を越えたものでした。感動するには、予想していたこと・ものを上回る必要がある、とある人が言っていました。まさにそういったシーンに出会いました。その迫力も演奏をしてくださった方達の言葉も、どれもが本物で一生懸命さがあふれていました。クラスの仲間の中でもかっこいい・楽しかった・ノリがよかった、などの感動を言葉にしていました。きっとその言葉の裏に、言葉では表せない何かがあるのでしょう。昨日の演奏もまた、言葉じゃない何かでその勇気をももらったような気がする。ある人は、自分の夢に対して頑張ろうと再確認した。ある人は自分の目標を見つけようと思った。正直なところ、僕も勇気をももらった。いろいろなことに対して、ちょっとだけ迷いがあったけれど、昨日の感動をバネにしてまた頑張れるような気がしてきました。本当にありがとうございました。」

との交流が演奏の素晴らしさと共に、その裏にある練習の厳しさ、一人一人の方が今の生き方を選んだだけきつかけ等を、語りの場で伝えていただければと願っています。」

それから、自分の将来・夢を語る練習が始まった。一年半一緒に暮らしてきた仲間が、今まで口にしなかったことを、中学生に向かって話そうとしている驚きと感動に研修生にとって、初めて一公演スタイルで人前に立つ機会である。興味を持ってくれるとは限らない観客の前に自分をさらすことは、何を伝えようとしてここで研修して

いるのかを自分自身に問い直さなければならぬ状況に追い込むことだ。ここで、今までの自分の考え、選択、不安そして希望を語る機会を得て、太鼓だけではまだ伝えきれない思いは言葉で、言葉にならないもどかしさを太鼓や踊りや唄にのせて...この交流公演は、何をしてもどうやってでも、今、目の前にいるあなた達に伝えたいという気持ちを自然に抱かせてもらえる、研修生にとって大切な場となっている。